

あなたと私の物語

私たちの世界宣教



TABLE OF CONTENTS

0. 序章「これはあなたの物語」	1
1. 「私たちの物語」としての世界宣教	2
2. これは私の物語？—なぜ世界宣教なのか	3
① 世界宣教の産声—神が作った世界と私たち	4
② 世界宣教の問題—神を裏切った私たちと世界	5
③ 世界宣教の前進？—神の民イスラエルを通して	6
④ 世界宣教の中心—イエス・キリスト	8
⑤ 世界宣教の前進—神の民、教会を通して	9
⑥ 世界宣教の完成—全世界のさばき	10
⑦ 世界宣教の完成—新しい始まり	11
3. 私の物語として生きる—どのように世界宣教？	14
① 存在によって	14
② 祈りによって	14
③ ことばによって	15
④ 生き方 [=行い] によって	17
⑤ 交わりによって	18
4. どこまで私の物語？—世界宣教と私の限界	20
① 世界宣教と境界線	20
② 世界宣教と霊性	22
③ 世界宣教と嘆き	24
5. これは私たちの物語—KGKと世界宣教	26
① 「遣わされた地で福音に生きる」	26
② 学内宣教	27
③ KGKとIFES	28
④ KGKと留学生宣教	29
⑤ 海外宣教	30
6. 私たちの物語を生きる—いつでも、どこでも世界宣教	34

0. 序章「これはあなたの物語」

子どもの頃から、冒険物語が好きでした。心躍るストーリー。魅力的な登場人物たち。次々とやって来る危険。幾多の試練や困難を乗り越えて、物語は輝かしい終幕へ。

大学に入り、KGKに出会って、交わりで聖書を学ぶ中で、知りました。実は、私が生きているこの人生の物語こそ、私が幼い頃に魅了された冒険物語以上に、偉大で魅力的な物語の一部だということです。

その偉大な物語とは、神の世界宣教の物語です。

神がこの世界の歴史の中で紡がれる神の世界宣教の物語以上に、人の心をワクワクさせ、喜びを与えるものはないと、私は確信しています。

このブックレットを通して、皆さんが、ちっぽけに思える自分の歩みも、何の変哲もないように思える自分の人生も、この心躍る神の世界宣教の物語の一部であることを見出すことができるようにと、心から願っています。

※ブックレットの中に、時々問い(Q)が出てきます。先に進む前に立ち止まって、少し思い巡らす時間をとってみてください。

Q. あなたが好きな物語は何ですか？なぜその物語は魅力的なのでしょう？

Q. 神の世界宣教の物語と聞いて、思い浮かぶことは何ですか？

1. 「私たちの物語」としての世界宣教

「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」 | テモテ2:4

世界宣教と聞いて、皆さんは何を思い浮かべますか？

アフリカの奥地に行って、福音宣教をすること？ フィリピンの貧しい子どもたちのために教育を提供すること？

多くの人は、どこか遠くの「世界」で行われる福音宣教を想像するのではないかと思います。もちろん、それらは、世界宣教の一部ではあるのですが、それだけが世界宣教というわけではありません。

世界宣教とは、私なりのことば、また、関東地区KGKの世界宣教委員会が長年かけて考えてきたことばで言えば、

「ひとりの神様が、ひとつの世界でなさる、ひとつの民である私たちを通してなさる、ひとつの宣教」です。つまり、**神様が、全世界で、私たちを通してなす宣教のわざが世界宣教**なのです。

そう考えると、身近な家族に一生懸命福音を伝えようとするのと、遠く海外に行って福音を体現する働きの違いはありません。日本宣教（国内宣教）と海外宣教（国外宣教）は、場所は違えど、ひとつの働きなのです。

アメリカの牧師で神学者のジョン・パイパーという人は、宣教とは、「礼拝なきところに礼拝をもたらすことだ」と言いました。言い換えると、究極的に宣教とは、シンプルに「神の栄光を現していくこと＝この世界を造った神の名が知られ、たたえられ、あがめられていくこと」だと私は思っています。

聖書の初めの書、創世記1-2章によれば、初めに、まずひとりの神がいて、ひとつの世界を造りました。そして、そこに神のかたちとして、神に似せて造られた「人」というひとつの民を置いたのです。ひとつの民の、ひとつの使命は、神のかたち（像）として、造った神の栄光を全世界に現していくことでした。世界宣教（神の栄光が全世界に現わされていくこと）は、創造の目的でもあったのです。

確かに、今、私たちの世界は、様々な言語や、文化、海や山に隔たれて、バラバラになっているように見えますが、ひとりの神が造った世界は、もともとひとつであり、ひとつの民がひとつの使命（ミッション、つまり宣教）に生きるように造られたのです。

2. これは私の物語？—なぜ世界宣教なのか

なぜ私たちは、世界宣教に招かれているのでしょうか？いや、そもそも私たちは、世界宣教に招かれているのでしょうか？

この問いの答えは、1章の中でも、部分的に触れていますが、2章では、もう少し詳しく、私たちが神のことばと信じている聖書から考えていきたいと思います。

私たちは、世界宣教に招かれているのか？招かれているとすれば、なぜか？

その問いに対するシンプルな答えは、**神様がそれを望んでいるから**。世界宣教は、**神様の御思いであるから**と言えると思います。

創世記から黙示録までの、聖書全体の物語を考える時に、この世界を造った神様は、**全世界のあらゆる国民に、自分自身のことを知らせたい、自分自身に関する良い知らせ（福音）を知らせたい**と願っているのが分かります。また、その情熱は、**より遠くの人へ、届いていない人へと、外へ外へと広がっていく**ことを知ることができます。

その神様の御思いを聖書全体の物語から見ていきましょう。

Q. 神の世界宣教を考える時に、思い浮かぶ聖書の箇所はありますか？

① 世界宣教の産声ー神が作った世界と私たち

「はじめに、神が天と地を創造された。」創世記1:1

「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」創世記1:27

1章でも触れた通り、初めに「神」がいたのです。そして、この神が「天と地」を創造したのです。つまり、神は、天と地とそこにあるすべてのもの、空も、海も、陸も、植物も、動物も、人間もすべてのものを造り、人を神のかたちとして、神に似せて造り、神を礼拝し、神とともにこの世界を治めるようにと、そのようにして神の栄光を全世界に運んでいくようにと、人をこの世界に置きました。それは、この上なく、良い世界、素晴らしい世界でした。世界宣教の始まりです。

私が大学1年生の時、友人が言いました。「祐也、クリスチャンでしょ？聖書教えてよ。」何人かの友人が哲学を学んでいて、キリスト教用語が出てきて分からないというのです。その友人達と一緒に聖書を読み、神様の話をした時、心にふつつつと喜びが湧き上がってきました。大好きな自分が尊敬している神様を友達に伝えるのは、こんなに楽しいのか！それは、純粹に神様の栄光、神様の素晴らしさについて語る喜びでした。

しかし、私の友人をはじめ、すべての人がこの神様の栄光を運ぶ喜びを知っているわけではないところに、世界宣教の問題があります。

② 世界宣教の問題—神を裏切った私たちと世界

「すると、蛇は女に言った。『あなたがたは決して死にません。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを神は知っているのです。』」創世記3:4-5

私たちが、神のかたちとして、神とともにこの世界を治め、神の栄光を運ぶ世界宣教の喜びに生きていない理由。それは、人が、蛇にそそのかされて、自分を造った神を裏切り、反逆し、神とともにこの世界を治め、神の栄光を現す使命を自分から捨て去ってしまったからです。ここから、この世界と歴史のすべての悲劇が始まりました。人は、神ではなく自分を礼拝し、自分の栄光を求めようになったのです。

私は、大学2年生の時に、KGKが属するIFES¹の東アジア地区大会に参加しました。東アジア中から600人近い学生が集まる大会でした。その時の説教で「あなたの人生はあなたのものではない。神様のものだ」と語られた時、私の心は刺されました。私が友人に熱心に神様のことを伝えようとしていた動機が、「(嫌な人とか、遠くの人とか、他の人はどうでもよいけど)自分の愛する大好きな友達にだけは神様を知って欲しい」とか、「自分がKGKの学生の間ですごいと思われたい」とか、全く自己中心であったことに気づかされたのです。私の「世界宣教」は、神様の栄光から始まる神様のためのもではなく、自分から始まる自分の栄光のためのもだった。「宣教」の働きにさえ、神様の栄光を求めない思いが入り込んでいたのです。

しかし、神様は、そんな自己中心な思いで神様の名前を使っていた私のことも、神様に反逆する私たちのことも、私たちが住む世界のことも、あきらめませんでした。世界を造った神の愛と真実は永遠に変わらないのです。人の反逆の罪によって壊れた、神と人、人と人、人と世界の関係を回復し、世界のあるべき本来の姿に回復するべく、世界を造った神は、この歴史と世界の中で、働き始めるのです。

¹International Fellowship of Evangelical Students 国際福音主義学生連盟。詳しくは、p29、5章「世界宣教とKGK」の「KGKとIFES」参照。

③ 世界宣教の前進？一神の民イスラエルを通して

「主はアブラムに言われた。『……地のすべての部族は、あなたによって、祝福される。』」創世記12:1-3

「どうか 神が 私たちをあわれみ 祝福し 御顔を私たちの上に 照り輝かせてくださいますように。あなたの道が地の上で 御救いが すべての国々の間で知られるために。」詩篇67:1-2

しかし、その回復は、人がもたらすことができるものではありません。人と造られた世界を絶対にあきらめない神の愛と忠実さゆえに、もたらされるものです。

神様は、壊れた人と世界を救うため、アブラムというひとりの人を選んで、神様の栄光を運ぶ神の民としました。このアブラム（後のアブラハム）の子孫イスラエルを通して、失われた礼拝が礼拝なきところに回復され、全世界に神様の栄光が運ばれること、世界宣教が前進することが神様の計画でした。

やがて、一民族から国となったイスラエルに、王としてダビデが与えられました。世界を造った神とともに世界を治めるこの王のもとで、神の愛と真理の良い知らせが、イスラエルを通して、あらゆる国の人に届けられるはずだったのです。

ところが、イスラエル自身も、度重なる反逆によって、世界宣教の使命を捨てようとしています。旧約聖書は、その度重なる反逆の歴史です。しかし、絶対あきらめないのが、世界を造った神様です。神様が変わらない愛と真実の計画の中で、アブラハムの子孫、イスラエルの子孫、ダビデの子孫から、世界宣教の決定的瞬間をもたらすイエス・キリストがやってくるのです。

私たちも、世界宣教の使命に生きる中で、何度も何度も失敗します。時には、神様に反逆することさえあります。それでも、この使命が奪い去られず、私たちが神の世界宣教の物語に生き続けることが許されるのは、私たちが何かしたからとかすごいからではなく、世界を造った神のただただあきらめない愛と真実のゆえです。

大学卒業後、私は、短期宣教師として遣わされていったある国で、体調を崩し、罪に陥り、自分に絶望して立ち上がれなくなった時がありました。自分が何も持っていないこと、何者でもないこと、何もできないこと（文字通り体調を崩してベッドの上で寝ている以外できなかった）を思い知らされ、「何のためにこの遠い国まで宣教師として遣わされてきたのか」「宣教師であることの意味はあるのか」と自問自答し、遣わされている意味が全く分からなくなったことがありました。

その時に、病で苦しむ母からメールが届きました。そこには、病で何もできなくなったのは、宣教師として息子を送り出したのは自分が成したことだと言わないためだと思うと語られていました。その母の証を通して神様から教えられたのは、私は結局のところ、何も持っていないし、何者でもないし、何もできないかもしれないが、神様が神様であるがゆえに、神様の愛と真実のゆえに、神様が私を選んで、召して、遣わしてくださったのだということでした。

（異邦人である）私たちが、イスラエルの物語と歴史を読む時に、こんなに神様に祝福されているのにどうしてこんなに何度も裏切るのだろうか、私はイスラエルとは違うとか、イスラエルはこんなに神様を裏切ったのだからもう愛されていないだろうか、思うことがもしかしたら、あるかもしれません。

しかし、私たちとイスラエルとは、全く変わらないのです。私たちも、人生の中で、何度も、何度も、神を裏切ってしまうことがあります。しかし、それで神様に愛されなくなるのではないのです。事実、イエス・キリストは、約束通り、アブラハムの子孫、イスラエルの子孫、ダビデの子孫からやって来たのです。そのイスラエルに対する神様の忠実な愛は、私たちに対する神様の愛も真実で、忠実であってくれるという確かなしるしです。そして、何度も失敗し神を裏切る私たちにいまだなお、世界宣教の使命が委ねられていることのあるしるしなのです。

Q.これまでの人生で神様を裏切ってしまったと思うような体験はありますか？裏切ってもなお愛してくださる神様の愛を実感したことがありますか？その神様の愛が、世界宣教の物語にあなたを押し出しているのだと聞いて、どう感じますか？

④ 世界宣教の中心ーイエス・キリスト

「.....彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」イザヤ53:5

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ヨハネ3:16

アブラハムの子孫、イスラエルの子孫、ダビデの子孫として生まれたイエス・キリストは、その生涯、特に十字架上の死と復活を通して、神様の栄光を全世界に示しました。イエス様は、この地上に赤子として生まれ、人間として生涯を送り、神様の愛と真実をことばと生き方で体現しました。そして、人間の反逆の結果である罪と死を十字架の上で引き受け、復活によって、再び人がこの世界を造った神を礼拝し、この神とともに世界を治めていくいのちに生きる道を切り開いたのです。イエス様の生涯は、神の世界宣教そのものでした。

このイエス・キリストの十字架上の死と復活は、神のかたちとして、神に似せて造られた、全歴史・全世界の人間のためでした。つまり、あなたのため、私のためでもあります。このイエス・キリストを聖霊によって主と告白し、洗礼を受けてキリストのからだなる教会に連なる時に、私たちは、罪赦され、神のかたちとして回復されて、この神の世界宣教の物語の担い手とされるのです。

私がイエス・キリストの福音を知って一番嬉しかったことは、自分が苦しみ葛藤する罪を赦され、罪から解放される歩みが約束されていること以上に、こんな小さな私が、罪に汚れ、壊れ、みじめで哀れで貧しくて盲目であったはずの私が、主の役に立てる、主の世界宣教の物語の担い手として用いられ得るという事実でした。

だから、私は大学3年生の時、関東地区KGKの夏期学校で、神様から「あなたはわたしが示す地へ行きなさい」との呼び声を聞いた時、涙が溢れて止まらなかったのです。嗚咽を隠せないほど泣きました。

「こんな罪ばかり犯す自分はダメだ、何の役にも立たない、何も成し遂げられない」と思っていたのに、心底信じ切っていたのに、イエス様は、「そんなお前のすべてを知っていて、お前を用いよう。わたしがともに行くから」と言ってくださったのです。

今や、イスラエルから遠く離れた地にて、何の希望もなかったはずの私も、このイエス・キリストの福音を知っています。知っているだけでなく、この福音を運び、神の栄光を現す使命に生かされているのです。

こうして、アブラハムの子孫を通して全世界が祝福されるという約束が成就しました。このイエス・キリストに連なるイスラエル人と異邦人（イスラエル人以外の外国人）を通して、祝福が、神の栄光が全世界に広がっていくのです。

⑤ 世界宣教の前進— 神の民、教会を通して

「.....神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。」エペソ1:22-23

教会とは、この世界を造った父、子、聖霊の神から遣わされたイエス・キリストを主と告白し、洗礼によって、キリストに連なった「キリストのからだ」です。そのような教会を通して、世界宣教の使命、すなわち全世界に礼拝を回復し、神の栄光をもたらす働きが進められていきます。教会、それは交わりです。私たちは、世界宣教にひとりではなく、交わりとして招かれています。世界を造った神の情熱が、聖霊を通して、教会を力づけ、励まし、交わりとして押し出していくのです。

こうして、歴史を越えて、世界を貫いて、イエス・キリストの良い知らせ（福音）が日本にいる私たちに、私のもとに、あなたのもとにも届いたのです。全歴史と全世界に連なる教会のたった一人でも欠ければ、福音は私のもとにも、あなたのもとに届かなかったのです。

考えてみてください。

この世界を造った神様、全世界と全歴史の王であり、主である方は、はじめ、小さな小さなイスラエルにのみ、ご自分を現されたのです。日本は、イスラエルから見れば地の果てです。およそ、永遠に交わりそうもない国です。

しかし、今や、イエス・キリストの良い知らせは、イエス・キリストのからだなる教会の働きによって、この日本にまで届きました。辺鄙な一地域パレスチナの神にしか過ぎなかったはずの神が、今や、この日本でも、私たちの口を通して、あがめられているのです。

私たちのイスラエルの神に対する信仰こそ、世界宣教の目に見える結果の一つです。

あなたがこの神を知るまでに、歴史の中で、世界の中で、どれだけ血と、汗と、涙が流されたか想像できるでしょうか。イエス・キリストの誕生と死と復活と昇天から2000年、数えきれないほどの人々が、このイエス・キリストの良い知らせのために、人生のすべてをかけ、いのちを捨て、この福音のバトンを次の人に手渡してきたのです。そのようにして、福音はあなたのもとに 届きました。

この福音は、無味乾燥な義務のように、伝えなくてはいけないというものではありません。次の人に、次の世代に、伝えられずにはいられない喜びの知らせです。

何よりも、絶対にあきらめない世界を造った神の愛と真実がなければ、決して、この良い知らせは、私のもとにも、あなたのもとにも届かなかった。世界を造ったこの神の愛と真実、歴史と世界を貫き、どこまでも広がっていく情熱こそ、神の世界宣教の物語なのです。

⑥ 世界宣教の完成—全世界のさばき

「ハレルヤ。救いと栄光と力は私たち神のもの。神のさばきは真実で正しいからである。神は、淫行で地を腐敗させた大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされた。」黙示録19:1-2

やがてその日がやってきます。神の怒りがこの地上に注がれる日が。神の真実で正しい裁きがくださる日が。その日は、神を信じず、神に従わない者にとっては、恐怖とおののきの日ですが、世界を造った神を礼拝し、世界宣教の物語に生きる私たちにとっては、慰めと報いの日です。

この世界には、歴史には、痛みがあります。破れがあります。不義が、不正が、罪があります。不条理が、理不尽があるのです。私たち一人一人の人生の中にも、この日本にも、世界にも。

私たちが世界宣教の働きに遣わされていく時、その世界の罪、破れ、痛み、傷、不義、不正に向き合うことなしに、キリストの福音をもたらし、神の栄光を運ぶことはできません。

私は、卒業後遣わされていった先で、そして、今遣わされているKGKの働きでも、自分自身の高ぶり、愚かさ、自己中心に向き合わされ続けています。同労者であるはずの主事の間でも、深刻な対立や衝突、罪を経験することがあります。卒業後の短い歩みの間にも、家庭、教会、KGK、社会、様々な領域で、人間の罪と闇を見せつけられてきました。

しかし、やがてそれらの悪や不正や不義、罪、神に逆らう人も権威もすべてさばかれる。滅ぼされる。神の愛の正義が実現する。神の裁きは、世界宣教の物語、この世界があるべき本来の姿に回復し、神の栄光が現わされるためには、なくてはならないピースです。

⑦ 世界宣教の完成—新しい始まり

「.....私は、新しい天と新しい地を見た。.....もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。.....すると、御座に座っておられる方が言われた。『見よ、わたしはすべてを新しくする。』」黙示録21:1-5

そして、造られたこの世界と人は、完全に回復する。イエス・キリストがこの地にやってくる時、すべての良いものが取り戻される。この世界を造り、回復した神の栄光が永遠にたたえられ、やむことのない礼拝がこの地に実現する。それは、神の世界宣教の物語の終幕であり、同時に、新しい始まりです。新しくされた神の世界で、私たちは、神の支配のもとに、永遠に神を礼拝しながら、神とともにこの世界を治め、永遠に神の栄光を現し続ける。新しい世界宣教の使命に生きるのです。

私は、今、教会で、様々な世代や文化の人々と一緒に礼拝を捧げる時、この未来を垣間見ます。結婚生活の中で、信じられないほどの親しさを経験する時、この未来を垣間見ます。IFESの兄弟姉妹とともに交わる時、この未来を垣間見ます。そして、KGKで学生が福音を知り、福音によって変えられていくのを見る時、この未来を垣間見ます。

やがて来るその確かな未来は、喜びの時、回復された人間関係、回復された世界、回復された仕事、神様の造られた世界を永遠に喜び楽しみ、神様ご自身を喜んで生きる永遠の祝宴（パーティ！！）です！

これが、神の世界宣教の物語。絶対にあきらめない神の愛と真実の物語。その愛と真実に捉えられた者たちの紡ぐ癒やしと回復の物語。

この物語は、何も偉大な英雄たちによって紡がれてきたわけではありません。むしろ、弱く欠けのあるボロボロで破れかぶれの名も無き小さな一人一人の人生を通して、偉大な神がこの世界と歴史に刻んできたものです。

聖書の中でも、そうです。アブラハム、サラ、イサク、ヤコブ、ユダ、タマル、モーセ、ラハブ、ダビデ、バテシェバ、ソロモン、イザヤ、エレミヤ、マラキ。誰一人として、完璧ではなく、光り輝いているだけの人物ではありませんでした。それぞれが、たくさんの人生の痛みと破れを抱え、つまづきながらも、あきらめない神の愛と真実に励まされて、一歩踏み出し続けて来たのです。

私もそうです。偉そうに世界宣教などと語っていますが、これまでの短い人生を振り返っても、今の自分の生活を見ても、とても誇れることのできない失敗や、欠け、罪に満ちています。私自身は弱者です。また、この世界宣教の物語に関してさえも、全くの無関心、神様の情熱など、計画など、どうでも良いと思っていた時期がありました。自分の名誉、栄誉、栄光を求めて、自分勝手に生きたいという思いから、本当に長い時間と、たくさんの人の関わりを通して、少しずつ、少しずつ変えられてきたのです。

あなたにも、今日踏み出せる世界宣教の一步があります。この世界とあなたを造った神様は、あなたを愛してやまないのです。あなたを真実に、忠実に愛し続けて、神は、全歴史と全世界を紡いできた。その情熱で、あなただけでなく、あなたの隣人も、あなたの友人も、あなたの家族も、あなたの知らない人も、あなたの敵さえも、神は愛している。そして、今も全世界で働いているのです。ご自分の民を通して、一人でも多くの人を、ご自分のもとに引き寄せようとして。

きっと、あなたに踏み出せる一步があります。それは、今、もっと神様に心を開くことかもしれない。もっとこの神の世界宣教の物語を知りたいと願うことかもしれない。あるいは、福音を勇気をもって学校の友人に伝えようとする事かもしれない。あるいは、すべての生活でこの神に従って真実に生きる決意をすることかもしれない。何でも良いのです。

今日、一日一步、今踏み出せるあなたの世界宣教の一步を踏み出してください。そうして、踏み出された名も無き人たちの数えきれないほどの小さな献身の一步が、全歴史の、全世界の世界宣教の物語、「ひとりの神が、ひとつの世界で、ひとつの民を通してなざる、ひとつの宣教」を推し進めてきたのですから。

Q. 創造から新創造までの神の世界宣教の物語の中で、特に印象に残った部分はどこですか？それはなぜでしょうか？

Q. 創造から新創造までの神の世界宣教の物語の中で一番ピンとこないのはどの部分でしょうか？それはなぜでしょうか？

Q. あなたは神の世界宣教の物語の一部に招かれていることを実感していますか？どのような時にそう感じ、どのような時にそう感じられませんか？

Q. あなたが神の世界宣教の物語を自分の物語とするために、何かできること、踏み出せる一歩はあるでしょうか？

3. 私の物語として生きる一どのように世界宣教？

では、どのように、この神の世界宣教の物語に加わっていただけるのでしょうか。

① 存在によって

「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」エペソ2:8

「こういうわけで、あなたがたは、もはや外国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。」エペソ2:19

聖霊が注がれて、イエス・キリストを主と告白した時に、あなたはキリスト・イエスのものとなりました。罪赦され、罪の奴隷から神の子どもとされて、キリストのからだの一部となりました。今や、あなたはイエス・キリストの教会、神の民の一員です。

イエス・キリストの生涯、十字架の死と復活によって、聖霊を通して、あなたになされた神の世界宣教のわざを思い起こすことが、世界宣教の始まりです。

自分が何者とされたのかを知り、思い起こし、確認し、感謝して、神様を礼拝することから、あなたの世界宣教が始まります。

② 祈りによって

「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるとのこと、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」Ⅰヨハネ5:14-15

世界宣教の働きで、あなたができる最重要の奉仕は、祈ることです。

ある人は言いました。「あなたがどれだけ伝道しても、奉仕をしても、良い行いをしても、サタンは恐れない。しかし、あなたがひざまずく（祈る）時、サタンは恐れおののく。」

私たちは、自分の力や努力、行いや経験で自分を救い出すことは全くできませんでした。だとしたら、他の人を救い出すこともできません。人を救うことができるのは、主です。主のみです。

とすれば、私たちがどれだけ努力をし、イエス様の福音を伝え、愛の行いに生きたとしても、全知全能の神、万軍の主が働くことがなければ、世界宣教の働きは前進しないのです。

しかし、私たちがひざまずいて、この全世界、全歴史の主に祈る時、私たちは、すでになされている神様の世界宣教の働きに加わることができます。

確かに、神様は、世界を救うのに、私たちが必要としないのです。しかし、同時に、神様は、私たちのためにこの世界を造り、私たちが神とともに生きて、神の栄光を運んでいくように私たちが造ったのですから、私たちを通して働きたいと願っています。

私たちが、自分の部屋であっても、バイト先であっても、電車の中でも、歩いている時も、学校でも、公園でも、世界宣教の主に祈るなら、私たちは、主がすでになされている素晴らしい働きに加わることができます。

ひとつ提案ですが、今度食事をする時の食前の祈りの際に、食べるものに関する人や国、物事について、世界宣教のために祈ってみてはどうでしょうか。

新潟産の米を食べる時は、新潟県の人々や教会のために。タイ料理を食べる時は、タイの人々や教会のために。韓国料理を食べたら、韓国の人々や教会のため。魚を食べる時は、漁師さん。野菜を食べたら、自然環境のため、等々。

人にとって欠かせない食事の時間を、世界宣教の働きに加わる機会としてみるのはいかがでしょうか。

また、祈るためには、いつもより少しアンテナを広げる必要もあるかもしれません。新聞やテレビのニュース、ネットニュース、実際の人の話など、日本のことも、海外のことも、祈りの種はそこら中に転がっています。

もちろん、いつもそうしたことに目を開いているのは難しいかもしれませんが、時には、その場で祈りながら、そうした情報を仕入れる時間があっても良いかもしれません。

③ ことばによって

「聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。」ローマ10:14

ことばと行いとの関係は不思議です。

ことばを発している時も、私たちが純粋に目に見えないことばだけでコミュニケーションを取るのは稀です。ことばを発する時も、人は手を動かし、顔を動かし、身体を動かして、様々な情報を伝えます。人が純粋にことばを通して受け取る情報は数パーセントにしかすぎないといった研究もあります。

また、声は、声帯を震わせ、空気を振動させて、聞く人の鼓膜を揺さぶることで、ことばを届けます。今このことばを紡いでいる時も、指を動かすことなしに、ことばをタイプすることはできません。その意味で、ことばも、ひとつの「行い」と言えるかもしれません。

そもそも、この世界をことばで造られた神にとって、「ことば」と「こと」（行い）に差はないのです。「光、あれ」と神がことばを発すると、光があったのです。神のことばは必ず実現します。

私たちは、この力ある神のことばを運ぶメッセンジャーとされました。神のことばとして、神が願うことをすべて実現したイエス・キリストというメッセージを運ぶのです。

メッセンジャーである私たちは、たいした存在である必要はありません。メッセージに力があるからです。私たちのたどたどしいことば、不明瞭な説明の仕方、よく分からない言い方であったとしても、私たちがメッセージであるイエス・キリストを届けようとするときに、聖霊が弱さのうちに働いて、人は、イエス・キリストに出会うことができます。

私たちメッセンジャーの生き方は、しばしば運んでいるメッセージ、イエス・キリストと乖離します。ことばと生き方にギャップが生まれることがあります。ことばと行いに全く乖離がなく、メッセージとメッセンジャーが完全に一致しているのは、イエス・キリストだけです。

それでも、欠けや弱さを抱え、今だなお罪を犯す私たちが、私たち自身ではなく、運んでいるメッセージを指し示し続ける時、人は、私たちを通して、神のメッセージであるイエス・キリストを受け取ることができるのです。

とはいえ、私たちがことばを磨くことも大切です。

弱さのうちに神が働いてくださることは、私たちが使命を投げ出し、責任から逃げることの言い訳にはなりません。何よりも、神のことばに親しむこと、完全な神のことばであり、神の「行い」（目に見える形で生き方を通して現された神のことば）であるイエス・キリストをより深く知っていくこと、そして、自分自身のことばで、自分が受け取った良い知らせを説明できるように備えておくことは、世界宣教の担い手として、必要な訓練です。

「むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。」 | ペテロ3:15

④ 生き方 [=行い] によって

「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」 II コリント3:18

神の聖なるメッセージを運ぶメッセンジャーである私たちは、メッセージだけを指し示し、メッセージに聞き続けることで、いつしか、メッセージであるイエス・キリストの姿に聖霊によって変えられていきます。

本当に少しずつ、少しずつではあっても、メッセージとメッセンジャーの間のギャップが埋まっていくのです。つまり、私たちの生き方が、福音（良い知らせ、良いメッセージ）にふさわしいものへと変えられていくのです。

福音によって、変えられた生き方が、私たちを変えた福音をさらに大胆に証します。メッセンジャーである私たちの生き方が、ことば以上に大胆に語るようになるのです。

それは、もはやことばで語る必要はないということの意味しません。アーティストが自分の作品を解説することがなければ、見ている人がアートの真の価値は分からないように、メッセンジャーの生き方がことばで説明されなければ、人がメッセージであるイエス・キリストを信じることはできません。

しかし、メッセージであるイエス・キリストに似せられたメッセンジャーの生き方は、周りの人々に問いを与えます。

「なぜあの人は、ああいう生き方をするのだろう。」

「あの人が信じている方はどんな人なのだろう。」

「私の人生にも、より深い目的や、意味があるのだろうか。」

「神はもしかして、本当にいるのだろうか。」

そうした問いが、私たちの生き方を通して、周りの人々の中に生まれていくのです。

勘違いしてはいけないのは、そうした問いは、私たちの成功や、うまくいっている姿、完璧な生き方を通して生まれるとは限らないということです。もちろん、神様に従い、神様を愛していくことで受け取った祝福や恵みを通して、周りの人がこうした疑問を持つこともあり得ます。

しかし、むしろ、私たちが失敗した時、罪を犯した時、うまくいかない時、苦難の中にある時、弱さを抱える時、自分に絶望した時、みじめで哀れな人生を送っている時に、私たちがどのように応答するかということの方を、周りの人は、よく見ているのではないのでしょうか。

神のメッセンジャーであり、メッセージそのものであるイエス・キリストは、みじめで衰れで貧しくて盲目で裸の者である私たち、神を知らない罪と死のうちに恐れおのき苦しんでいた私たちのためにこそ、この地上に来て、いのちを捨ててくれました。そして、よみがえって私たちに良い知らせを届けてくれました。

私たちの苦難のうちの歩み、弱さのうちの歩み、勝利も、栄光も、貧しさも、喜びも、キリストとともに生きる、ありとあらゆる私たちの生き方を通して、この方は証されていくのです。

⑤ 交わりによって

「あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。」

Ⅰコリント12:27

私たちは、ひとりではありません。実際のところ、世界宣教に向かっていく時に、この事実ほど大切なことはありません。

聖霊が注がれ、イエスを主と告白し、キリスト・イエスと一つになった時、私たちはキリストのからだの一部となったのです。聖霊を通して、イエス・キリストにあって、全世界、全歴史の教会に連なる者となりました。

教会に、個人のスコアボードはありません。私たちは、ひとつのからだです。ひとりですべてをうまくやる必要はないのです。それぞれに与えられた賜物があります。

私たちは、ひとつの民として、ひとつのチームで、この世界宣教の働きを担います。世界の始まりから、世界の終わり、すなわち、新しい世界の始まりまでの全歴史の中で、また、今も全世界のあらゆる国民、言語、部族の間で生きるひとつの神の民の中で、どのような役割を私は担っていけば良いのかという視点が大切です。

働きをなさるのはかしらであるキリストであり、からだである私たちを通して働きます。私は、手なのか、足なのか。指なのか、へそなのか。自分の人生の今のステージの中で、また、今の神様の関係の中で、どのような選択をしていけば良いのか。神様に問い、神のことばと神の民に聞きながら、歩いていく。それが、私たちの世界宣教の歩みなのです。

学内の友人に福音を伝えることにしても、家族にイエス様を分かち合うことにしても、ひとりで孤独に向かっていかなくて大丈夫です。教会の兄弟姉妹と、KGKの友人と、祈りつつ、励まし合いながら、助け合いながら、私たちは世界宣教の物語に遣わされていきます。

言い換えると、教会を愛する私たちの歩みから世界宣教が始まると言ってもよいかもしれません。私たちが、教会に連なり、交わりとして集い、教会が語られるキリストの福音に生かされ、互いに愛し合い、仕え合う交わりを建て上げていくことを通して、神の世界宣教の物語は紡がれていくのです。

Q. 世界宣教の5つの方法の中で、あなたにとって一番難しいと感じることは何ですか？

Q. 世界宣教の5つの方法の中で、あなたがこれから真剣に向き合っていきたいものはどれでしょうか？

4. どこまで私の物語？－世界宣教と私の限界－

①世界宣教と境界線

「私たちは、あなたがたのところに行かなかったかのようにして、無理に手を伸ばしているではありません。事実、私たちは他の人たちに先んじて、あなたがたのところキリストの福音を携えて行ったのです。私たちは、自分の限度を超えて他の人の労苦を誇ることはしません。ただ、あなたがたの信仰が成長し、あなたがたの間で私たちの働きが、定められた範囲の内で拡大し、あふれるほどになることを望んでいます。」Ⅱコリント10:14-15

ここまで、世界宣教が、全世界でなされる神様の宣教のみわざ、ひとりの神が、ひとつの世界で、ひとつの民を通してなされる、ひとつの宣教であることを考えてきました。あなたも、かしらなるキリストにつながり、キリストのからだである教会に連なる者として、この世界宣教の働きに召されています。

キリストのからだの手として、足として、（あるいは、目として、耳として？）世界宣教の働きを担っていくということは、ひとりで何でもやるということではありません。ひとりひとりに、与えられた領域、任された働き、責任があり、境界線があります。

時と場所の制約があります。学生、働いている人、独身の人、結婚している人、子育てをしている人、年齢を重ねた人、それぞれの人生のステージや状況によって、見える世界も置かれている文脈も全く異なります。自分が置かれている時と場所によって、私たちができること、私たちが担える役割に、限界があります。限界は必ずしも悪いものではありません。突破すべき限界もありますが、神様から与えられた「賜物」として受け入れるべきである限界もあります。

パウロが、度重なる宣教旅行や、新約聖書の大部分となった手紙を教会に向けて書いたことなど、あれだけの働きを成し遂げられたのは、パウロが独身であったからだろうと推測されます。パウロと親しく、パウロの働きを支えた友、アキラとプリスキラ夫妻は、パウロと一緒に旅をし続けることはできませんでした。（あるいは、自分たちの限界を認めて、しませんでした。）しかし、アキラとプリスキラ夫妻は、むしろ、ひとつの町に留まることで、その地の教会を建て上げる良い働きをしました。

また、キリストの弟子としての成長や成熟の段階があります。まだ聖書を読み始めたばかりの人に、「では福音を聖書から包括的に三分で分かりやすく明確に説明してください」と言うのは、無茶でしょう。あるいは、友達に「クリスチャンなんだ」と言うことを恐れて葛藤している人に「今すぐその友達にイエス様の福音を伝えてきなさい」と言うのも酷だと思います。

もちろん、聖霊が働いて、突然今まで考えられなかったような一歩を踏み出せることはあるでしょう。しかし、焦らずに、踏み出せる一歩を踏み出し続けることがまず大切なのではないかと私は思っています。

学生時代、こうした限界や境界線のことを私は全く分かっていませんでした。あらゆる宣教の機会やチャレンジに、「イエス」と言って応答しては、燃え尽きることを繰り返していたのです。自分が今どんな時と場所に置かれているのか、どんな信仰のステージにいるのかも分かっていませんでした。同時に、そうして自分のようには「働かない」クリスチャンをさばいてもいました。そうした手痛い失敗や、燃え尽きを通して、神様から多くのことを教えられました。ですから、失敗や燃え尽きがすべて悪いとは思いません。

しかし、すべての人が私のように失敗や燃え尽きから学ぶべきだとも思いません。それぞれの人に、世界宣教の主が願っている成長の旅路があり、今踏み出して欲しい一歩があります。聖霊の導きにしがって、人に対する恐れからではなく、神様と神様が造られた人に対する愛から、その一歩を着実に踏み出していくこと。その先に、自分に与えられた分の世界宣教の使命を全うする人生があるのではないのでしょうか。

前章の最後に書いたことの繰り返しになりますが、何よりも、私たちが、かしらなるキリストにつながることを通して、キリストのからだである教会に連なる者とされたことを覚えることが大切です。私たちは、それぞれの教会に属することを通して、全歴史、全世界の教会の一員となったのです。私たちは、全歴史、全世界の教会の一員として、自分に任せられたほんの一部を担えばよいのです。私たちが、日々担う小さな働きが、小さな一歩が、やがて神様の偉大なる計画の中で、世界教会宣教史のかけがえのないピースとなっていきます。

その上で、世界宣教の理解と実践において成長するために、大切なことは、まず聖書から神様の世界宣教の情熱を受け取ることです。教会の説教、教会の祈禱会、日々の静思の時、聖書通読、聖書研究会、神のことはを聞くあらゆる機会を通して、神様の大きな、大きな世界宣教のビジョン〔幻〕を受け取っていくこと。そのようにして、一番大きなところから、日々の小さな実践を受け止めていくことができます。言ってみれば、外から内へという成長の矢印です。

一方で、内から外へという成長の矢印もあります。身近な家族、友人、隣人、周りの人々に、福音を伝え、福音を示す生き方へと変えられていくことです。それは、自分の救い以外に無関心な自己中心の状態から、家族から隣人へ福音を示す生き方へと、必ずしも「直線的に」成長する旅路ではなく、時には難しい家族との関わりを避け、親しい友人の救いのみ熱心になったり、顔見知りの方が関わりやすいからと親しい友人をすっ飛ばしてみたりしながらも、行きつ戻りつしながら、主の情熱を自分のものとしていく方向へ成長していくのです。

②世界宣教と霊性

「主はサムエルに言われた。『……人はうわべを見るが、主は心を見る。』」

Ⅰサムエル16:7

3章の「どのように世界宣教？」の「①存在によって」のところで、「自分が何者とされたのかを知り、思い起こし、確認し、感謝して、神様を礼拝することから、あなたの世界宣教が始まります」と言いました。この世界を造られた世界宣教の主である神様とあなたの関係と世界宣教の働きは密接につながっています。というより、それは、ひとつのことです。

世界宣教の働きは、私のことばで言えば「神の栄光を現していくこと＝この世界を造った神の名が知られ、たたえられ、あがめられていくこと」でした。つまり、自分自身が、神様の栄光を知り、神様の栄光に心捉えられ、魅了されていくことこそ、世界宣教の中心にあることなのです。

『ケープタウン決意表明』という文書にはジョン・ストットという神学者の以下のことばが引用されています。

「すべての膝がイエスの前にかがみ、すべての舌がイエスを告白することを神が望むならば、私たちも同じことを望むべきである。私たちは神の御名の名誉のためには（聖書が時に言うように）『ねたみを持つ』べきである。私たちは、御名が知られないままでいれば心を痛め、御名が無視されれば傷つき、御名がおとしめられれば憤り、御名に当然与えられるべき名誉と栄光が与えられることを常に切望し、そのことに本気で取り組むべきである。**すべての宣教者の動機の中で最高の動機は、大宣教命令への服従（これも重要ではあるが）でも、疎外されて滅びに向かっている罪人への愛（これに対する意欲も、ことに神の怒りを思う時には強まるのだが）でもなく、むしろイエス・キリストの栄光を求める熱意、燃えるように一途な熱意である。**（中略）クリスチャンの宣教のこの至高の目標を前にしては、価値のない動機はすべてしおれ、死に絶える。」²

私たちを世界宣教に押し出していくのは、何よりも全世界の王であり主であるイエス・キリストとの関係性、全世界を造り治めている神の栄光なのです。

² 下線・太字著者。p16 日本ローザンヌ委員会訳『ケープタウン決意表明』いのちのことば社、2012年。p53 John Stott, *The Message of Romans, The Bible Speaks Today*, Leicester and Downers Grove: InterVarsity Press, 1994より引用。

同時に、私たちが父、子、聖霊なる神様との関係の中で、世界宣教の働きに押し出されていったその先でも、三位一体の神様との関係が重要になります。なぜなら、世界宣教の最前線、すなわち、私たちの日々の生活の中で、私たちは、信じられないほどの重荷、敵である悪魔からの攻撃や妨げ、自分や人、この世界の罪の現実の厳しさ、私たち教会も含めた人類の悲惨さ、破れ、痛みに出会うからです。

私たちに任された働きや責任、務め、使命が重ければ重いほど、目の前の現実、問題、課題が厳しければ厳しいほど、私たちは、神様との親しい関係性を必要とします。その神様との関係の太いパイプ、エネルギーの供給源、私たちを押し出す神の力がなければ、決して、日々の世界宣教の働きの重荷を支え切れないからです。

何も、海外の奥地で、非常に厳しい住環境で、キリストに明らかに敵対する異教の地で宣教のわざに励む宣教師のことだけを思って言っているわけではありません。実際のところ、私たちが、日々の生活、目の前の現実を、目を見開いて直視するなら、父、子、聖霊なる神様との親しい関係がすべての人にとって必要であることは明らかなのです。しかし、私たちは、そのことにしばしば気付いていないだけなのです。

教会の集まりに参加し、ともに神のことばを聞き、互いの重荷を負い合い、励まし合うこと。日々、主の前に静まり、主の前に出て、主のことばを聞き、一日を、一週間を、一か月を、一年を主とともに振り返ること。私たちが日々抱える重荷を、主とともに負っていただけるに、主のもとに身を避けて、主のもとに安らぐこと。そうした安息の時間が、私たちにはどうしても必要なのです。

主の世界宣教の情熱を自分のものとし、燃やされて、神に遣わされていく時、私たちは、簡単に活動主義（ただひたすら止まらずに休まずに働き続ける）に陥り、自分の力で事を成し遂げようとして、この世界宣教の働きに押し出したはずの神様との関係を、主の栄光を忘れることがあります。

私たちは、忘れてはいけない大切なことを忘れます。それが、私たちの肉の性質、罪の性質の一面です。神を忘れ、神の恵みを忘れさせようとする。しかし、だからこそ、忘れないようにすること以上に、日々立ち止まり、思い起こすことが必要なのです。私を救い出し、自分のものとしてくださったのは誰だったのか。私を世界宣教の働きに押し出してくださったのは誰だったのか。私と今もなお、ともにいてくださる方は誰だったのか。その主を思い起こし、礼拝する。交わりである教会でも、一人でも。神様とのいのちの交わりに留まることから、力強い世界宣教の働きが溢れ流れてきます。

③世界宣教と嘆き

「主よ なぜ あなたは私のたましいを退け 私に御顔を隠されるのですか。」詩篇88:14

私たちが、世界宣教の働きに遣わされていった先で出会うのは、人々が神を知り、救われ、ともにこの神を礼拝することに加わっていく喜びだけではありません。むしろ、意図的に意識的に神を拒絶する人。神を罵り、馬鹿にする罪。人間の弱さ、欠け、目を覆いたくなるほどの悪。そして、自分自身のどす黒い闇にも出会っていきます。

そんな一寸先も見えないような闇に出会う時、自分自身も人も世界も神も分からなくなるような漆黒の闇に囲まれる時、私たちができる強力な祈りは、嘆きの祈りです。

聖書の中に出てくる人物たちは、自分自身の、人の、世界の欠け、弱さ、不完全さ、罪、悪に出会う時に、そして、それに対する神の怒りと裁きを思う時に、涙を流し、心を引き裂き、崩れ落ちて、ひざまずき、神に向かって嘆きました。

「主よ、どうしてですか。いつまでですか」と。

嘆きの祈りは、主の真実と愛、義と平和を信じているからこそ、そうでない目の前の現実を嘆き、神の裁きと救いを待ち望む信仰の祈りです。人や世界の罪、自分自身の罪のままならなさを嘆きながら、それさえも、神様に祈りのうちに心注ぎ出し、告白し、委ねて、神様が現れてくださるのを待ち望むのです。それは、主イエス・キリストが再びこの地上に来られて、すべての不義をさばき、世界を新しくする、救いの完成を待ち望む祈りでもあります。

私たちが日々の生活の中で、キリストの弟子として、世界宣教の物語の一端を担う者として、苦難や試練、自分自身の罪や、人の罪、世界の罪に出会う時、私たちは、主に対して心注ぎ出し、嘆き、救いを求め、主の栄光を待ち望むことができます。

愛する人が、親しい人が、自分がいのちを削って時間と力を注いで仕えている人が、神に従わず、神を恐れず、神を拒絶して生きる現実を目の当たりにする時に。そして、そうした人に向き合う自分の中にさえ、そのように神に従わず、神を恐れず、神を拒絶する思いがあることを見る時に。私たちの心は痛みに張り裂け、打ちひしがれますが、私たちのその嘆きを聞いてくださる方がいます。その心の奥底からしぼり出され、響くうめきもまた、世界宣教の大切な祈りの一つなのです。

Q. 世界宣教と境界線、靈性、嘆きの中で、特に心に留まったことは何ですか？
それはなぜですか？

Q. 世界宣教と境界線、靈性、嘆きの中で、一番自分がないがしろにしてしまいがちなことは何ですか？

Q. 世界宣教と境界線、靈性、嘆きの中で、あなたの生活において、特に意識して実践していきたいことはありますか？

5. これは私たちの物語—KGKと世界宣教

① 「遣わされた地で福音に生きる」

KGKが70周年にあたり、KGK学生、卒業生、主事、および支援協力するすべての主にある兄弟姉妹ともに、KGKを建て上げてきたことばとして宣明した「礎のことば」には、これまで述べてきた世界宣教のエッセンスがすべて詰まっています。

福音の豊かさを知るとは、世界宣教の動機付け、始まりに他なりません。キリストの福音の豊かさを知り、父、子、聖霊の神ご自身を知り、この神に知られる人格的交わりの中で、キリストのからだなる教会として私たちは、世界宣教に押し出されていきます。

私たちは、このキリストの福音の豊かさを知る中で、キリストのからだなる教会として、主にあって建て上げられていきます。この世界を造られ、この世界を救い、この世界を完成される唯一の神を礼拝する群れが建て上げられていくのです。

そして、このキリストのからだなる教会として、私たちは、全生活・全生涯を通して、神の栄光を証していきます。全世界に、この神の栄光が豊かに現わされるように。

このことばは、すべてのキリストの弟子、教会に当てはまることですが、このことばを学生宣教の文脈で、教会の枝として、教会を支えるために、実践していくのが、KGKの働きです。

その意味で、KGKの活動は、すべて世界宣教の働きです。学内であれ、ブロックであれ、地区であれ、全国であれ、祈り会であれ、聖書研究会であれ、ブロック祈祷会であれ、合宿であれ、すべては、この世界宣教の働き＝福音の豊かさを知り、キリストの教会を建て上げ、全生活・全生涯を通して証する働きの一部として存在しているのです。

②学内宣教

学生による学生の宣教団体であるKGKにとって、世界宣教の最前線は、学内宣教です。『学生の伝道2022』にはこうあります。

「イエス・キリストは全世界の人が福音を聞くことを望んでおられます。それは国境を越えた全世界を意味すると同時に、生活圈や文化圏も異なるすべての造られた者への宣教を意味します。そう考えると、私たちの遣わされている学校も主の世界宣教の最前線なのです。」³

私たちが、自分の遣わされた学校で福音に生きる時、それは、世界宣教の最前線に生きているということです。

あなたは、神様の世界宣教の計画の中で、今遣わされている学校に置かれています。あなたは、教会からその学校に遣わされた宣教師なのです。あなたと、あなたとともに置かれたキリスト者学生以外に、学生という堂々とした身分をもってその学校に入れる人はいないからです。

キリストにある学生として、私たちは、神様への礼拝として学びを受け止め、神様から預けられ 任されたものとして、授業や、レポートや卒論に取り組みます。同時に、私たちは、まだイエス・キリストの福音を知らない友人たちに福音を告げ知らせ、日本にいる300万人の学生という広大な学生世界に向けて、世界宣教の前線を押し進めていくのです。

学内で、あなたにできる世界宣教の一步は何でしょうか。友達にクリスチャンとすることでしょうか。手を抜いていた学びに真剣に取り組むことでしょうか。キリスト者の友人とともに祈り会を始めることでしょうか。聖書研究会を始めることでしょうか。同じ信仰をとともにする友人が与えられるように、祈り始めることでしょうか。キリストを知らない友人の世界に心から関心を持ち、愛していくことでしょうか。

たった一人の学生の祈りが、キャンパスを変え、国を変え、世界を変えてきた。それが、KGKの歴史であり、IFESの歴史であり、世界の学生宣教の歴史です。たとえ、今はみすぼらしく、たいしたことのない自分や、自分の学内グループに思えていても、その祈りは、その活動は、その生き方は、その存在は、確かに、神様の世界宣教のわざの中で、かけがえのないピースとして用いられていくのです。

KGKの全国の活動、地区の活動、ブロックの活動は、この学内宣教に収束していきます。今日も、明日も、明後日も、あの遣わされた学校で生きる歩みが世界宣教の働きであることをぜひ覚えていて欲しいと願います。

³『学生の伝道2022』 p.26-27

③KGKとIFES

KGKが世界宣教の一部であることは、礎のことばという理念からだけでなく、KGKの歴史や組織からも実感することができます。

KGKは、同じ志をもった世界規模の交わりであるIFES（International Fellowship of Evangelical Students 国際福音主義学生連盟）⁴に加盟しています。それは、KGKが始まった時から、このIFESを通して、たくさんの励ましと支援、協力と学生宣教のビジョンを受け取って来たからです。⁵そもそも日本の学生宣教の働きであるKGKが始まっていく背後には、神様の世界大の学生宣教の働きがありました。当然それは、神様の世界宣教プロジェクトの一部だったのです。

IFESは各国にある独自のムーブメント（運動）が協力する交わりで、2022年現在、世界約170の国と地域に置かれているムーブメントがこの交わりに加わっています。IFESは、世界を11地区に分けて協力体制をとっており、KGKは東アジア地区に属しています。東アジア地区には、18の国と地域が含まれ、そのうちの16には、IFESに加盟している、あるいは交わりのあるムーブメントが存在します。⁶

KGKは、こうした世界中のIFESムーブメントと協力しながら、学生一人一人が「遣わされた地で福音に生きる」ことを励ます学生宣教の働きを担っているのです。

⁴『学生の伝道2022』 p.29

⁵『学生の伝道2022』 p.60

⁶『学生の伝道2022』 p.73-74

④KGKと留学生宣教

KGKがIFESに属していることは、文字通り、KGKに任せられている日本の学生宣教の働きが、世界大の学生宣教、世界宣教の一部であることを体現するものです。一方、日本の中でも、私たちが、世界宣教の働きの一部を担っていることを実感できる働きがあります。

それは、**留学生宣教**⁷の働きです。

KGKは、50年以上にわたりOCF（Overseas Christian Fellowship）と協力しながら⁸、世界宣教の主が日本でなさる留学生宣教の働きに加わってきました。OCFは、日本にいる宣教師と留学生が中心になって始めた働きです。留学生を中心に、名前の通り、日本にいる外国人にも開かれた交わりとして活動してきました。OCFは、KGK主事でもあったOMF宣教師や、KGKにも関わる留学生を通して、発足当初からKGKとの協力関係を持っています。

現在は、KGKの留学生宣教主事が立てられ、OCF担当主事としてもOCFに関わり、KGKの日本の学生や留学生とともに、留学生と日本にいる外国人のために仕えています。

OCFの働きの他に、KGKには、留学生の多い学内グループも与えられています。そうした学内では、英語しか話せない、あるいは英語の方が不自由なく話せる留学生のために、英語聖研が持たれています。英語聖研は、留学生のための居場所としてはもちろんですが、英語を話したい、学びたい日本の学生、留学生と交わりたい日本の学生、日本に生まれ育ったが他の国の背景を持つ学生、聖書を英語で読んでみたい未信者の学生や未信者の留学生など、様々な学生の居場所にもなっています。その意味で、英語聖研は、多様な背景を持つ学生が交わる「ハイブリッド」聖研とも言えるかもしれません。

一方で、英語が話せない留学生も多くいます。日本に来たからには、日本語と日本の文化を学びたいという留学生もたくさんいるのです。こうした留学生が、KGKの中で居場所を見出せるように、すべての学内グループの祈り会や、聖書研究会、ブロック、地区、全国の活動が、日本語がまだあまり得意でない留学生や、日本とは異なる文化を持った学生にも開かれたものとなっていくこと、言い換えれば、すべての活動が文化的「ハイブリッド」になっていくことも、大切な留学生宣教の働きです。

ある人は、留学生宣教の働きを「地の果てに行くまでもなく、地の果てが私たちのもとにやってきた！」と表現しました。日本に現在30万人近くいる留学生は、今後も増え続けると見込まれています。また、日本に住む外国人の数も増え続けています。周りを見渡しても、親しい友人や知り合いが他の国の背景を持っているということは、珍しくないと思います。こうした日本にいる外国人、留学生をキリストにあって、歓迎し、受け入れ、愛することも大切な世界宣教の働きの一部です。

⑤海外宣教

今置かれている場所で福音に生きることが世界宣教。行くべき「地の果て」がこの日本の地までやってきたのが留学生宣教。こうしたことを聞くと、いわゆる世界宣教と聞いた時に最もイメージしやすい海外宣教（日本を出て、海を越え、海外で福音に生きること）は、もういいのかなと思うかもしれません。

それは、違います！

確かに世界宣教が「すべての場所からすべての場所へ（From everywhere to everywhere）」の時代になったと言われて久しくなります。かつて、「キリスト教国」だと思われていた国々で、真剣にキリストにつき従う弟子の数は減っていて、今は、アフリカやアジア、南アメリカの方が、教会は急激に成長しています。

そもそも、世界宣教における協力は、経済的に豊かな国が貧しい国を助けることではなく、あるいは、教会が多いところから少ないところに宣教師を送るだけではなく（もちろんそれも大切ですが）、それぞれに与えられている賜物を活かしあい、互いに仕え合うことです。（聖書の例で言えば、使徒の働きで小さなマケドニア教会が大きなエルサレム教会を助けたり、激しい迫害下で経済的にも厳しかったはずのピリピ教会がパウロの海外宣教を助けたりしたことなど。）

また、従来いわゆる「宣教師」像（すべてを捨てて他の国に行き宣教活動に従事する）は崩れつつあり、仕事をする中で教会に仕える者、仕事を神様の宣教の働きの一部として捉えて働く者（つまりすべてのキリスト者！）が、世界宣教を担っていく大切さが注目されています。（実際のところ、使徒の働きなどを見れば、すべてのキリスト者が最初からそうした働きを担うように招かれていることは明らかだと思います。）

しかし、だからといって、これまでのようないわゆる「宣教師」や、実際に海外に行き仕える者の働きの価値がなくなったわけではありません。むしろ、つながる世界の中で、ますます重要になってきていると言えるでしょう。

Global Frontier Missionsという団体によれば¹⁰、世界人口70億人のうち、福音を聞いたこともなく、教会もなく、聖書もなく、周りに一人もキリスト者がいない人々は、約29%（約20億3000万人！）だと言います。そして、最も豊かに教会や聖書など資源を持っている国から派遣されている宣教師のほとんど（97%！）は、この29%にではなく、すでに教会がある他の地域や国々に派遣されています。驚くべきデータです。

⁹『学生の伝道2022』 p.75

¹⁰Global Frontier Missions “State of the World / The task remaining”
<https://www.youtube.com/watch?v=WfRHC7hXNoV8&t=126s>

確かに、日本は、宣教が難しい国だと言われていますが、それでも、数え切れないほどの教会、素晴らしい翻訳聖書、神学校、キリスト教書など、多くのリソースが与えられています。苦しみは比較できるものではないので、マイノリティとしての私たちの葛藤はリアルなものだと受け止めるべきですが、同時に、私たちが客観的に見て、恵まれているのも事実なのです。

日本の総人口の約15倍の人々が、教会も、聖書も全く触れたことがないし、見たこともないということが想像できるでしょうか。私は信じられません。

日本の人々が福音を必要としているのと全く同じように、世界中のあらゆる国の人々も福音を必要としているのです。

もしかしたら、神様は、あなたを日本ではなく、他の国に遣わそうとしておられるかもしれません。これは、日本と海外のどちらの方が必要が大きいかという話ではなく、神様は、あなたにどんな賜物を与え、あなたをどのように導き、どのような場所に招こうとしておられるのかという、神様の御心と計画の問題なのです。

家族や、友人、同国人、同胞にどれだけの必要があったとしても、世界宣教の主があなたを他の国に導かれるなら、あなたはその導きに従うべきです。たとえそれがいわゆる「宣教師」として派遣されるにせよ、他のかたちで遣わされるにせよ。神様に従順になるよりも、不従順になる方が祝福されるということはありません。「私は日本に遣わされているのだから」と最初から決めてかかったり、思い込んだりすることなく、神様の心と導きに、どうか心を開いて欲しいと願っています。

私は、かつて「こんな国出て行ってやる」と心底思っていました。日本で生まれ育ちながらも、子供の頃のいじめの経験や、文化に馴染めなかった経験など、日本に関する心の傷があったからです。大学1年生の時に、生まれて始めて海外に行った時、水を得た魚のように生き生きと心が躍ったのをよく覚えています。その後も大学時代は、海外に行くことを繰り返し、いつか海外に住むことを夢見ていました。

確かに、神様は、私が海外に住むことをしばらくの間許されましたが、しかし、今は私を日本に遣わしています。いつか海外宣教師になりたいという思いで行った先で示されたのは、「あなたは日本に帰って、あなたの同胞を育て、海外に送り出さない」ということでした。だから、私はこうして熱心に主の世界宣教の情熱を語っているのです。

もちろん、この先は分かりません。いつかまた海外に行くかもしれないし、海外宣教師として遣わされるかもしれない。あるいは、一生日本で世界宣教の語り部として仕えるのかもしれませんが。今の私にとっては、究極的に、どうでもよいことです。主が遣わされる場所へ行き、別の場所へお呼ばれすればそこへ行く。私たちの父祖アブラハムが、主に遣わされた地へどこへでも行ったように。それが、私たちキリスト者の生き方であり、世界宣教の担い手として、キリストにある考え方、生き方ではないかと思えます。

さて、あなたが将来、海外宣教に召されているかどうかは分かりませんが、学生の間もできる海外宣教があります。

その一つは、他の国や地域のIFESムーブメントに関わることです。他の国や地域のIFESの兄弟姉妹と交わりを持ち、実際にその国に行って、互いに祈り合い、神のことばをともに聞くことです。

KGKとIFESには、そうした様々な機会があります。例えば、KGKの全国集会NC (National Conference) に他の国や地域のムーブメントから海外ゲストが参加することがあります。そうしたゲストに声をかけ、話を聞き、ともに祈り合うことは、他の国や地域のムーブメントが担っている（私たちににとっての）海外宣教の働きをともに担うことになります。

EARC (East Asia Regional Conference 東アジア地区大会) があります。KGKが属しているIFES東アジア地区の宣教大会で、東アジア中の何百人の学生とともに、神のことばを聞き、祈り、賛美し、主の世界宣教の思いをともに受け取ることができます。EARCは様々な国がホストするので、実際にその国に行って、その国の文化や人々の関わりを体験することができるのも、大きな魅力です。

他にも、IFESムーブメントの世界総会である4年に一度のWorld Assembly、卒業後は、EARCの卒業生版EAGC (East Asia Graduate Conference 東アジア卒業生大会) など、KGKを通して、海外で行われている宣教の働きについて、聞いたari、実際に祈りや交わりを通して関わる機会が多くあります。

各ムーブメントが主催する全国集会や宣教大会に参加することもできます。これまでKGKがツアーを企画して学生と主事を送ってきた大会には、アメリカのInter Varsity (IFES) による1万人以上の学生が集う世界最大の宣教大会アーバナ (Urbana) 宣教大会や、オーストラリアのNTE (National Training Event 全国訓練会) がありました。また、留学中にその国や地域のIFESムーブメントに関わり、全国集会や宣教大会まで参加したという学生もいます。

留学は、実際、学生時代に経験できる最大の海外宣教体験かもしれません。数か月、半年や、1年間など期間は様々で、目的は様々（語学留学や交換留学など）だと思いますが、留学生として遣わされていった地で福音に生きる時、あなたは、海外宣教師です。

現地のIFESムーブメントに関わることができます。留学生として、留学生宣教に関わることもできます。同じ学校に派遣された日本の学生に福音を分かち合うこともできるでしょう。日本にいる時よりも、海外にいる時の方が、ずっと新しい文化や考え方に開かれているはずです。

これまでも、KGKの学生が留学先の海外IFESムーブメントや、現地の留学生宣教の働きにつながり、燃やされ、訓練され、留学生として福音宣教に生きた証がたくさんあります。あなたももしかしたら、学生時代に、留学を通して、海外宣教を経験する機会が与えられているのかもしれません。

Q. あなたは学内宣教を世界宣教の最前線として受け取っていますか？受け取っていないとしたら、それはなぜだと思いますか？

Q. KGKとIFESの関係をあなたはどのようなものとして受け取っていますか？

Q. OCFと留学生宣教について、新しく気づいたこと、学んだことは何ですか？

Q. 海外宣教についてどのような思いを抱きますか？海外留学を海外宣教と捉えることについてどう思いますか？

6. 私たちの物語を生きる—いつでも、どこでも世界宣教

最後に、主の世界宣教の物語と情熱に生きることは、旅路であることを強調して終わりたいと思います。私たち神の民である教会は、歴史の始まりから終わり、そして、新しい始まりに向かって、旅をしています。

神が、この世界を造られ、神がこの世界を新しくされます。その新しい創造のわざは、「すでに」イエス・キリストの十字架と復活を通して、成し遂げられました。しかし、「いまだ」完成してはいません。その「すでに」と「いまだ」を旅する民が、教会です。

私たち一人ひとりの人生も同じです。聖霊によって、イエス・キリストを主と告白し、洗礼によって教会に連なる者とされた時、「すでに」新しく造り変えられた者とされました。しかし、「いまだ」完成されてはおらず、やがてイエス・キリストがこの地に再び来て、新しいからだをもってよみがえる日を待ち望んでいます。私たち一人ひとりも、「すでに」と「いまだ」の旅をしているのです。

あなたは、かしらなるキリストにつながり、キリストのからだなる教会に連なることを通して、「すでに」世界宣教の担い手とされました。しかし、「いまだ」完成していない世界宣教の物語を自分の物語としていく道の途上にあります。

ですから、すぐに世界宣教の担い手として大活躍を求めたり、世界宣教の担い手としては何の役にも立っていないように感じて落ち込んだりする必要はないのです。主の世界宣教の物語の中で、今あなたが置かれている場所と役割の中で、今日あなたにできる一歩を踏み出し続けることが大切です。そして、その旅路をあきらめないこと、あきらめても、また神様と神の民に励まされて、何度でも何度でも、再び立ち上がって始めることが重要です。

OMFの「神の宣教に参加する6つの方法」¹¹では、私たちにできることとして、①祈ること、②学ぶこと、③動員すること（励ますこと）、④迎え入れること、⑤送り出すこと、⑥出て行くことを挙げています。

私たちは、いつでも、どこでも、祈ることができる。神の御心について知ること、この世界の現実について学ぶことができる。他の人をこの宣教の働きに招き、励ましていくこと（動員すること）ができる。この日本の地に来た人を歓迎し、迎え入れることができる。自分は出て行くことができなくても、出て行くとする友人を支え、送り出すことができる。そして、主がお呼びになるならば、私が行くことができる。

¹¹ OMF 「神の宣教に参加する6つの方法」
<https://omf.org/jp/get-involved/six-ways/>

このうちのひとつなら、あなたにも始められるかもしれない。あるいは、このうちのいくつかを少しずつできるかもしれない。私たちは、一人ひとり、異なった個性と、賜物と、人生の旅路があります。今、あなたが置かれている場所で、遣わされている文脈で、あなたにできること、始められることは何でしょうか。

学生時代、主の世界宣教の情熱に燃え立たされては、すぐに自分の情熱、力、経験に頼って、燃え尽きる自分がありました。そうした燃え尽きの時は、決まって自分の惨めさ、虚しさを慰めるために、罪に陥り、ひどい自己嫌悪に悩まされました。情熱を抱く自分と、カラッポになって罪の中でもがき苦しむ自分。そのギャップに苦しみ、自分の偽善っぷりに絶望していました。

しかし、今振り返って分かるのは、そうした闇の旅路、死の陰の谷、真っ暗闇で、罪と汚れにまみれ、自分で自分のことをあきらめきっていた時も、世界宣教の主は、私とともにおられたということです。いや、むしろ、そうした罪のどん底で絶望しきっていた私にこそ、主は、「わたしがお前を贖ったのだ。わたしはお前に計画がある。わたしのもとに来い」と手を伸ばし、言い続けてくれていたのだと分かります。

今もなお、落ち込むことがあります。絶望することがあります。あきらめそうになることが、いやむしろ、あきらめてしまうことさえあります。目の前の厳しい現実。変わらない人や自分の現実。世界の厳しい現実。日々の生活や働きの重荷に。罪と悪がはびこる世界であきらめるのは、簡単です。

しかし、私があきらめたとしても、決してあきらめない方がひとりいる。全世界の人間が絶望しても、決して絶望しない方がひとりいる。それは、イエス・キリストの父なる神、聖霊なる神です。何があっても、どんな状況でも、どんな時でも、ご自分の栄光とご自分の宝である民を決してあきらめない方の情熱が、愛が、真実が、この世界宣教の働きを推し進めていく。世界宣教の主である神の情熱が、愛が、真実が、世界を変え、世界を新しくするのです。

だから、今日も、私は立ち上がりたい。何度あきらめそうになっても、何度あきらめても、私は、再び立って、私にできる一步を踏み出したい。

あなたにも、今日、できる一步がある。

ひとりの神が、造られたひとつの世界で、ひとつの民である私たちを通してなされる、ひとつの宣教。それが私たちの世界宣教。

今日、あなたも、この世界宣教の物語に生きる一步を踏み出しませんか。

Q. このブックレットを通して、世界宣教について、新しく気づかされたこと、
学ばされたことは何ですか？

Q. あなたが踏み出せる世界宣教の一步は何ですか？



発行日 2023年4月初版発行

著者 島田祐也 (KGK主事)

発行者 キリスト者学生会

発行所 〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル402号室